



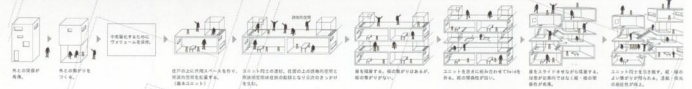
一 間 一 路 地 再 生 型 集 合 住 宅

天草義仁 (あまくさよしひと)

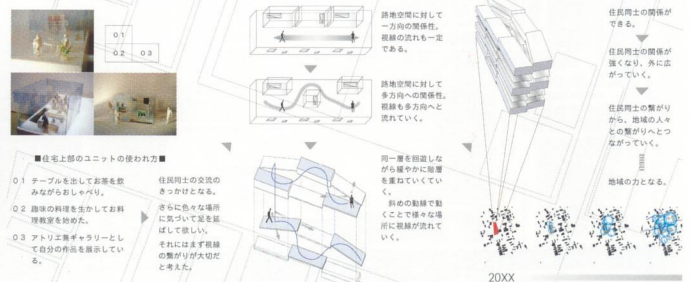
千葉工業大学 工学部デザイン科学科



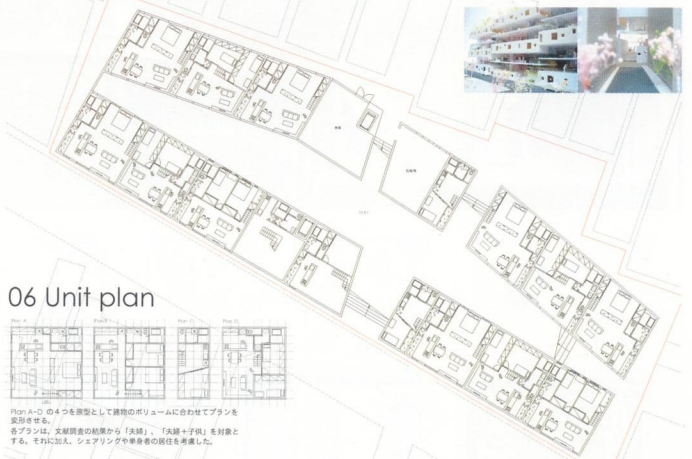
03 Diagram



04 Diagram



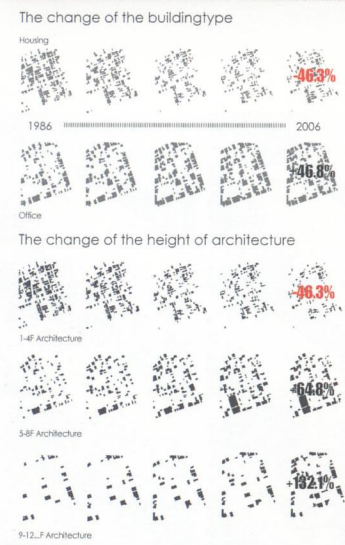
05 First floor plan S=1/150



06 Unit plan



Plan A-Dの4つの原型として建物のボリュームに合わせてプランを表現する。各プランは、文庫階の距離から「文庫」「文庫+子供」を対象とする。それに加え、シェアリングの専有者の居住形態も示した。



近年、都心部への回帰が進み、各地域において従来の環境が急速に変化している。その変化の過程においては多くの問題が存在し、中でも地域の人間関係の希薄化は、マナーや安全面、さらに言えば暮しの豊かさにおいて、住民に影響を与えていると考えられる。

対象地とした神田多町は古くから市場文化発祥の地として栄えてきた。しかし、高度成長期以降オフィスビルやワンルーム共同住宅の建設などによって地域住民同士の関係は薄れている。

本設計では、路地という共通空間を見つめ直すと共に、住民の居留意識を向上させる居住形態を模索し、地域の活性化につながる集合住宅を提案する。



【講評】 真っ白い集住BOXとスレンダーなスラブが段違いに立体構成されて、リズムカルに浮かぶ軽やかな模型と内観写真が爽やかな印象の作品である。

敷地は神田多町、周囲をビルに囲まれた敷地に焦点を当て都市にどう住むかという課題に、路地という共有空間を見つめなおし、その空間によって住民の意識を個から共へ変化させる居住形態——ひいては地域の活性化へつながる集合住宅を考える提案である。2本の住棟は一層おきにテラス、ピロティーをもちスキップフロアーの段違いとずれた住棟配置によって空間に変化を持たせたセンスは巧みである。各住戸の持つパブリックスペースと呼ぶガラスのショーケースとテラスが横の抜けを作り、住棟間の縦方向の吹き抜けとともに都市に光と風の通り抜ける心地よい空間を作り出している。

しかし、建物内の開放的な空間とは裏腹に周囲との関係が弱く、人の流れを呼び込んだり自然に通抜けしていくようなアクセスや立体的動線計画によって都市とつながってゆくシステムやストラクチャーが考案されればさらに良くなったと思う。

【審査員：柳田富士男】